自然は「生きる」ことの意味を教えてくれる
－機械論的理解を捨て、生命論の自然理解を－

八木　雄二

授業が始まったきっかけ

立教大学の全カリの教科を担当させてもらって10年近くになろうかと思う。その間に大学改革があって、全カリも改革が行われた。外部の人間から見ても、さまざまな努力がなされているのは、好ましいことである。外部の教科担当者としては、いささかめまぐるし過ぎた感もあるが、おかげで、新しい試みが評価されやすい、という空気をつくっているのかもしれない。わたしが今年度から担当している「生態系と人間の未来」というこの授業も、まったく新しい試みである。ただ、この担当教科が認められたのは、新刊の拙著を見てくれた立教大学にいる友人のおかげであって、自分が売り込んだものではない。だから立教大学がこの目新しい授業を取り上げてくれたのは、かなり「夢のような話」であった。

とはいえ、この教科が実現した背景の一つには、前年の後期に「人生の思想」という教科を担当してほしいと頼まれ、そのとき、具体的な内容として、自分が書いたばかりの『生態系倫理学の構築』という著作の内容を滑り込ませた、ということが始まりかもしれない。自分としては、かなり難しい内容なので、書いた本の中身を授業で話す機会はほとんどないだろうと思っていた。ただ、授業名が「人生の思想」ということだったので、まあ、関係ないわけではないから使ってもかまわないだろう、というくらいのつもりだった。そのとき予想していた学生数は、多くても 30 人くらいだった。ところが、学生のほうは何を勘違いしたのか、600 人を超える登録者が来て、とんでもない大教室（教室というより講堂）での授業になった。当然、遠い席は、立ったり座ったりする学生が居て、授業時間中の学生に十分な落ち着きがなかった。かなり心配したが、毎回、そんななかでも熱心に聴く学生が教室のなかに思いのほか見られたのである。話の中身はかなり哲学的なものであった。しかもその哲学的な中身がこれまでの欧米の哲学の記述には見られない文脈なので、そうは言っても結局最後には、学生は数人しか残らないだろう、と当初は思っていた。それが、少なくとも 100 名を超える学生が最後まで熱心に聞いてくれていたのである。

講義の話は、どうやら学生たちの耳にかなり新鮮に響いたようだった。授業評価をレポートにしていたので、読むのがたいへんだったが、それでも楽しかったのは、やはり学生が、自分が期待していた以上に、話の中身を理解してくれていたからだった。哲学的だから学生からまた「むずかしい」と言われるのではないか、と心配がついつい先に立っていたのであるが、まったくの杞憂に過ぎなかったようである。なかには、たいへんな情熱を込めてレポートを作成した学生もいた。また、本当に驚いたのは、ある女子学生が、自分の父親に授業内容を話し、レポートも読んでもらい、父親の感想まで書き添えていたことだった。親掛かりで講義を聴いてもらえるとは思いもよらなかった。

そのあと友人のはからいもあり、引き続いて「生態系と人間の未来」という表題で授業を組んでもらったので、今年の前期は新座で、後期は池袋で、大勢の学生相手にほぼ同じ内容を講義することになった。いずれも学生の履修登録数は、500 人を超える。

学生側のニーズ

この授業が始まったのは、以上のような幸運によるものである。とはいえ、学生の聴講が多かったのは、自分でも考えていなかったところに学生側のニーズがあり、それがこういう結果を生じているのではないか、と考えている。その辺りのことについて、思うところを記しておこう。

せちがらい世の中なので、うがった見方をすれば、たしかに履修登録の数の多さは、成績のとりやすさだと思いがちである。わたしも当初は「甘く見られたな」と思っていたが、熱心な学生のレポートを見て、今では学生を信頼する気になっている。それは一世代かそれ以上に違う自分と学生の間でも、共通に感じていることがあるのだ、という信頼である。

それを正確に短く表現できることばはないが、しいて言えば、世界が無機的になり、環境破壊もあって、無気力にならざるをえない状況が進んでいる、という感覚、生命を取り戻す道はどこにあるのか、という思い、こういう思いは、けして今よりは自然があった日々を知っている自分たちだけの思いではない、という確信である。

わたしは立教で「人権思想の根源」という授業も担当していて、毎回、その内容について悩むのであるが、その悩みにも通じる。つまり人権を理解するためには、「生きる」ということを理解しなければ、どうしても雲をつかむような話になる。思想としては、西洋の思想史的流れがあるが、それを説明しても、「実感」がともなわない。現代においてとくに見失われているように見える「いのち」の視点が、人権問題には必要なのではないか。しかし、それをどのように説明したらいいのか、という悩みがいつもある。

とにかく生命をそのまま説明する必要がある。やはり土台になっているのは、思想というより、生命の事実なのではないか。学生も、自分たちの世代も、生命の事実から離れてしまっているのではないか。そのことが学生側のニーズとしてあって、それに応えるところがこの授業にあるために、学生がこの授業を聞いてみようとしているのではないか。今では、そのように考えている。

授業内容

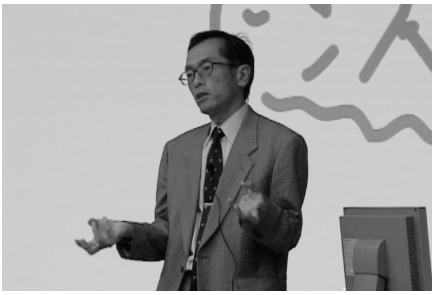
授業内容を簡略に説明することはむずかしい。というのも、この授業は、わたしの個人的発見にもとづいているからである。つまり通常の研究や学習によって生まれたものではない。そのために簡潔なことばでは、誤解されるかもしれない。とはいえ、しいて言えば、以下のようになる。

生命は、現在見られる「生態系」の状態と、「進化」の歴史という、2 つの側面においてその本質を見せている。生命は進化を繰り返して来たし、そのときどきに生命は生態系と呼ばれる共同体をつくって来たからである。ところで、生態系の状態に実際に係ってみると、植物と動物の間に協働関係が見られる。わたしが自然のなかに体験的に発見した関係は、競争関係ではなく、協働関係だったのである。しかしまた、生命はその当初の進化（原核細胞から真核細胞へ）の段階においても、協働・共生の関係が見出されている。すなわち、古い型のバクテリア（古細菌）と新型のバクテリア（ミトコンドリア型）の共生である。

これらの事実から、わたしは、「共生」こそが生命の本質であると考えた。そし

て、その原理を当てはめていくと、恐竜の進化と絶滅についても、あらたな説明が可能になる。さらに同じことから、人間の進化を見てみると、人間が何を行うために地球上に現れたのか、という人間の本質論が可能になる。そしてそれは人間の絶滅原因がなにであるかも、明らかにする。つまり、生命がもつ関係は生命を維持発展するための協働関係であると見れば、種が進化する、という局面は、新しいはたらきをもつ生命が生物社会の一員に入ってくる、ということであり、絶滅は、出て行く、ということである。このとき、入り口になるところがそのまま出口になる。なぜなら、種はそのはたらきが生物社会を維持するために意義をもつことができたとき、種に抜擢される（進化する）のであるから、反対に、そのはたらきの意義を失ったときに、出て行く（絶滅する）、ということだからである。

競争関係で記述される今の生物学では、進化は他の種に比べて優秀であったからであり、絶滅は他の種に比べて劣っているから、という理由付けしかされない。しかし、この場合、何について優秀なのか、ということが明確にされることはない。なぜなら、「自然選択」という漠然とした答えが用意されているだけだからである。この授業では、協働関係こそが種の間の関係であると考える。すると、どういう意義があって、人間は種として生物社会の一員になったか、ということを明確にすることができる。それと同時に、どういうことで人間は絶滅するか、ということも明確にできるのである。競争関係では説明できないことが、協働関係では説明できる。これも、答えを知りたがっている学生にとって、この授業がインパクトをもつ理由だろう。


授業風景

また生命とはまったくの偶然の賜物である。しかし偶然ということは、原因がわからない、ということと、じつは等値なので、科学では説明できない、ということでもある。現在生きているどんな生き物も、38億年前と見られる偶然の結果をうけて、はじめて「生きている」。無生物から生物を生じさせる科学技術は絶対にありえない。科学は生命のある場所を移し変えることができるだけである。このことも、折に触れて学生に語っている。ところで、それは何を意味するのか。そのなかのもっとも重要な事実は、科学よりも、わたしたちの感覚のほうが、命の意味を知っている、ということである。感覚というと、主観的に過ぎない、と見られて、一般には、科学の客観性に対して劣った認識としてしか受け取られてこなかった。しかし、科学は生命と非生命を見分けることすらむずかしいのである。生命を見分けることでは、わたしたちがもつ感覚のほうが数段上なのである。現場の生物学者も、生き物は自分の目で見て判断するのであって、ガイガー計数管のような器械で判断したりはしない。だから、自分の心に問いかけることが、生命を理解するときには、たいへん重要になる。心の底からの幸せや、喜びは、自分が受け継いでいる本物の生命のあらわれなのだから、自分の心で生命のはたらきを知ることができる。すなわち、他人に打ち勝ったときが、生命の喜びを感じるときなのか、それとも、だれかを助けてあげられたとか、いっしょに過ごすことができるときに、そういう喜びを心に深く感じるのか、と

いうことで、生命の本質が何であるかが、むしろ正確に理解されるのである。

講義のなかで、こうした話は、学生にとっても、新鮮な見方であるらしい。本に書いてあることよりも、自分の持つ感覚が科学を超える力をもつという説明は、自信を失いがちな若い人たちにも、励みになるのだろう。そして、こういう見方によってこそ、人権問題も、いじめの問題も、あるいは、環境問題も、袋小路に陥らずに考えていくことができる。わたしが見つけたことは、簡単に言えば、こういうことなのである。つまり生命理解こそ、あらゆる現代の社会問題の解決のために必要なものである。しかも、このような理解は、きわめて多くの視点を作ってくれる。わたしたちを一面的な理解から解放してくれるものである。したがって、それは全カリのような教養課程の意義をもっともよく実現してくれるものだと言えると考えている。

授業風景

授業の工夫

最後に、授業の工夫に関してであるが、特別なものはない。むしろさいわいなことに、大人数の講義なので、こちらもめりはりのある説明が欠かせない、と思わざるをえない。毎回、自分がそんな風に追い込まれるために、自分でも不思議なくらい明解な説明を組み立てることができるのである。それがまた学生に話が伝わりやすい理由になっているのだろう。少人数だと、ついついその場で考え込んだような話になってしまい、学生にはわかりにくい話し方になってしまう。どうも自分は、大人数向きの教師なのかもしれない。

やぎ　ゆうじ
（本学兼任講師）